
ぷりんせすデイズ

リリィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぷりんせすデイズ

【Nコード】

N3441E

【作者名】

リリイ

【あらすじ】

水嶋恭介は普通の高校生である。スポーツはできるが、成績は中の下。彼女いない暦Ⅱ年齢。そんな恭介の前に、ある日突然女の子が！普通の高校生とちよっとおかしな少女が繰り広げるドタバタファンタジックラブ？コメディ。

プロローグ（前書き）

リリースです。

文章めっちゃくちゃですが、がんばって完結まで書きたいと思います
！

プロローグ

「はあ…はあ…お、お止め下さい姫様！　いくらなんでもそれは危険過ぎます！」

見た目50台だろうか、初老の男が小さな女の子へ向けて必死で叫んだ。

姫様と呼んでいるところを見ると、男は変なおじさんか執事だろう。

歳の割に勢いよく走ったせいか、少しの距離だけなのに息が切れている。

だが、その執事的な男の叫びを無視して、姫様と呼ばれた女の子は一段1mはあろうかという段差を何段もよじよじと登っている。

「…あゝ…もう！　付いてこないでよセバスチャン！　パパ様もママ上様もあたしを部屋に閉じ込めて、あんなことやこんなことをやらせるからいけないのよ！　だからあたしは…」

「あ、あんなことやこんなことといえますとおお！！」

名前からして執事確定の男セバスチャンが、姫様が喋り終える前に叫びだした。

姫様はその叫びに少し戸惑いながら、また口を開く。

「だからあた…」

「と、いいますとおおお！！」

「……………」

姫様は、頂上まであと少しとなった段差を再び登り始める。

「と、いいますとおおお！！」

セバスチャンは諦めず再度問い掛ける。

聞こえないのかな？　などと意味不明な心配をしながら、セバスチャンも段差を登り始めた。

身長140センチ程の姫様にはキツイ段差も、身長180と長身なセバスチャンには何の苦にもならず、物凄い速さで登っていく。

時間をかけてよじよじと登った姫様にすぐにでも追い付く勢いだ。
「はあ：はあ：と、いいますとおおお！！」

何とか姫様に追いついたセバスチャンは、今度こそと叫んだ。

「ひ、ひゃあああ！！ 近い！ 近いわセバスチャン！ 耳元でふんふん言わないでえー！」

「あ、姫様からいい香りが…」

「ばかあああ！！」

「はうお！！！」

姫様は、何とか逃れようと抱きつくセバスチャンの股間を蹴り上げた。あまりの痛さに股間を押さえもじもじするセバスチャン。

その隙に、姫様はあと少しとなった段差を上りきった。

よく見ると段差はピラミッドのような形になっていて、頂上には魔方阵のようなものとその中心に扉がある。

姫様は頂上に着くと、扉に向かってゆっくりと歩き出した。

「これが“世界を繋げる扉”ね…」

そう言うと、姫様はゆっくりと扉に手をのばす。

「お願い…あたしを外の世界へ連れて行って…！」

姫様の祈りが通じたのか、扉はゆっくりと開きだした。

扉の向こうからは光が溢れ、まるで姫様を受け入れるかのようにその光は姫様を包み込んでゆく。

「さようなら…セバスチャン。パパ上様…ママ上様も…みんな…」
そして、光が消え去った後に姫様の姿は無かった。

プロローグ（後書き）

最後まで読んでくださってありがとうございます。
学生なので、更新は遅めになるかもしれませんが…
とりあえず短いので、がんばって長く書けるように努力します！
どうか応援よろしくお願いします。

第一章：女の子（前書き）

リリースです。

ブログ投稿してからそろそろ1週間：

ちよびちよびと書き進めてきたけど、このままじゃあ読んで下さる方に見捨てられてしまいそうなので……（汗）

短い上に途中ですが投稿します……（滝汗）

第一章：女の子

「…起きなさい」

突然身体が重くなったと思ったら、そんな声がかかってきた。

確か今日は日曜日。自分以外の家族は用事で外出していて、誰一人として家にはいないはずだ。

じゃあさっきの声は誰だろう？

恭介は寝ぼけて何かと聞きまちがえたのだろうかとうと目を閉じたまま寝返りを打ち、二度寝にしゃれこもうとする。

「きゃっ」

ドサッ

寝返りを打った瞬間、上に乗っていたであろう“なにか”が落ちて急に身体が軽くなった。それに女の子の声が聞こえる。

「ちょっと何するのよ！」

再びする女の子の声。

女の子は怒った様子でボスボスと布団を叩いている。

うるさいなあ。

恭介はしぶしぶ寝るのをやめ、ゆっくりと目を開いた。

「あ、やっと起きたわね！ あたしはヴァージニア・ジェリー・ド

…」

スースー

「寝るなあああ！」

ボスボスボス

女の子は駄々をこねるようにポカポカと布団に入っている恭介を叩く。

ダメージは無いのだろう。恭介から全く反応は無い。

やばい！ どうしよう！ 不法侵入？！ 俺昨日窓の鍵閉め忘れ
たっけ？！

なんとか狸寝入りで誤魔化し、うんうん考える恭介。

：とりあえず起きよう。そして、警察でも呼ぼう。

恭介はそう決心し、恐る恐る目を開ける。

「っ！！」

恭介は目の前の光景に声に出ない程驚いた。

ち、近い！

目を開いた先にあったのは女の子の顔だった。

クリクリとした大きな目は、透き通る海のように澄んだ青色をしていて、その間にある少し低めのかわいらしい鼻は思わず押してみたくなる程愛らしい。髪は紅く、サラサラとしたストレートヘアで、腰を超えるだろうかという程の長髪。きめ濃やかな白い肌は、頬をぷにぷにとしてしまいたいほど柔らかかそうな魅力を放っている。かわいい…

恭介はそう思った。

彼女は目の色からして、まず日本人ではないだろう。そんな女の子が何故この家に居て、自分の部屋で自分を起こしているのか。

恭介は考えた。

これは夢じゃないだろうか？

昨日こっそり飲んだ父親のビールの罰が当たったんだろうか？

それとも…

「ねえー」

恭介が昨日の出来事を振り返ってぼーっとしているのを見て、気だるそうに女の子が呟く。

「ここはどこ？」

「…へ？」

不意をついた彼女の質問に、恭介は戸惑った。かわいい女の子の質問に

「…へ？」と答えたのは多分人生初だろう。

恭介は戸惑いながらも、恐る恐る質問に答える。

「えっと…俺ん家の俺の部屋…だけど…」

「そんなこと聞いてないわ！」

彼女は勢いよく恭介の返事を否定する。

じゃあどんなことを聞いているんだよ。

恭介は突っ込みたい気持ちを抑え、心の中で突っ込みを入れる。

「どこの大陸！？ どこの国！？ …まさか！ ルメルヘアじゃないでしようね？！」

何言ってるんだこの娘。

電波なのか？ かわいい顔してるのにもったいない…

意味不明な質問に若干引き気味の恭介。

可哀相なのでとりあえず質問に答える。

「ここは日本。英語でジャパン。残念ながらルメルヘア？ だっけ？ そこじゃない」

恭介は呆れたように告げ、女の子を見た。

第一章：女の子（後書き）

次回は、この続きです。

が、頑張って、もう少し長く…

最後まで読んで下さってありがとうございました m
┐
└
m

第一章：女の子2（前書き）

うう…短い…

文章おかしいところや無理矢理なところがあるかもしれませんが、
生暖かい目で見てやってください m（　　） m

第一章：女の子2

さっき見た時は特に気にはしなかったけど、髪や瞳も凄いが服装も凄い。

高級そうな生地に綺麗な装飾品がちりばめられていて、ヒラヒラしてたりふわふわしてたり。

まるで、どっかの金持ちがパーティとかで着てそうな、高そうなドレスだった。

「に、にっぽん？　じゃぱん？　……てことは、ここはルメルヘアじゃないのね。すごい……もしかして本当に別の世界に……」

女の子は何やら興奮しているようで、ブツブツと呟いては『あ、でもっ』とか『だとしたら』とか繰り返している。

恭介はその様子を見ながら、恐る恐る口を開いた。

「お、おい！　なにがどうなってるか全然わかんねえけど、とりあえずお前何なんだよ！」

恭介の言葉で我に返った女の子は、落ち着く為にすうーはあーつと何回か深呼吸するとフンと鼻を鳴らしながら喋り出した。

「人に名前を聞く時は自分から名乗るものよ？　まあ、教えてあげるわ。あたしはグルファース王国のマイ・ルメルヘアを治める公爵の娘。ヴァージニア・ジェリー・ド・マイ・ルメルヘアよ。覚えておきなさい」

「はあ？」

グルファース王国？

マイ・ルメルヘア？

公爵の娘？

何言ってるんだこいつ。

いきなり女の子が、自分のことを知らない国の知らないところの公爵の娘だと言ったことにあっけをとられ言葉も出ない恭介。

「見たところ貴方、平民よね？　ここを自分の部屋って言ってたし。

丁度いいわ。暫くあたしをここに泊めなさい」

「…はあ?!」

俺の部屋に泊まる? 女の子が?

自称、公爵の娘のお嬢様が?

口をパクパクとさせ、何も言い出せない恭介を尻目にヴァージニアは恭介のいるベッドに座り、靴を脱いでいる。

「はあ? じゃないわよ。はい。でしょ? で、貴方、名前はなんていうのかしら?」

靴を脱いで、ベッドにペタンと脚を伸ばして座った状態で、足の指をわきわきとさせながらヴァージニアは恭介に言う。

「あたしはもう名乗ったんだから貴方も名乗りなさいよ」

「きよ、恭介……水嶋恭介だ」

「あらそう。きよーすけって言うのね。ふふっ、変な名前……」

「うるせえよ」

「これからよろしく。きよーすけ」

第一章：女の子2（後書き）

今回も最後まで読んで下さってありがとうございますm（　　）m
プロログでセバスチャンから姫様と呼ばれていたヴァージニアで
すが、実は公爵の娘なんです。

実は姫様じゃないんです（笑）

私にしては珍しく設定を考えてあるので、姫様と呼ばれる理由はそ
の内出てくると思いますが……下手すれば結構後になるかも……（
汗）

一応、第一章もプロログ的な感じで書いていたので、第二章から
一気に話が変わる可能性があります、そこはご了承下さいm（　　）
m

最後に、もしよろしければ次回も読んで頂けたら幸いです。

第一章：女の子3（前書き）

目茶苦茶更新遅れてすみませんm（　　）m
調子に乗って今日から私?!とかとは違う文章の書き方に挑戦した
んですが、見事に撃沈したので、次回からは文章の書き方が変わる
可能性があります。ご了承ください。

第一章：女の子3

「で、これからのことなんだけど」

互いに自己紹介も終わったところで、ヴァージニアが思い出したように口を開いた。

恭介は生き生きと楽しそうに話すヴァージニアを見ながら困った顔をしている。

「ここはあたしの住んでいた世界とは違うってことはわかったわ。で、きょーすけを見るところ服の形状なんかもちよっと違うみたいね。宿は見つかったし、あと必要なのはー……」

ニヤニヤしながら恭介を見るヴァージニア。

「ち、ちよっとまで、えと、ばじにーあ？　だっけ？　お前もしかして服よこせていってんのか？」

「あら、わかってるんだったら早く用意してよ。あと、あたしの名前はヴァージニア！　ばじにーあじゃなくてヴァージニアよ！　わかったら早く服を用意するの！」

名前を間違えたことが気に食わないのか頬を膨らませて機嫌悪そうに言うヴァージニア。

恭介は黙ってればかわいいのになあとか考えながらため息をつく。

「あーあーわかりました。出せばいいんですね服を」

恭介はベッドから立ち上がると、タンスからズルズルとジャージを引っ張り出す。あまりかっこいいともかわいいとも言えない小豆色のジャージを選び、ヴァージニアに軽く放り投げた。

「それ、中学ん時体育で使ってたジャージ。多分俺の服の中でそれが一番小さいから、とりあえずそれ着てみるよ」

「わっ！　ち、ちよっと、投げないでよね！　びっくりするでしょ！」

ヴァージニアはなんとかジャージをキャッチし、今着ているドレスを脱ごうとする。

「んっ…んっ……………」

背中にチャックか何かが付いているのか、腕を背中に回し、一生懸命手を動かしている。

これはこれで見ていてかわいらしいが、なんだか可哀相なので手伝おうと恭介が声を掛ける。

「お、おい……大丈夫か…?」

「んっ……んっ……あゝもうっ！ 手伝いたいなら速くやりなさいよ！！」

上手く脱げないことに不機嫌なヴァージニアは早くやれと言わんばかりに恭介に背中を向けた。

「はいはい…これでいいんだろ」

チー……………」

恭介が急かすヴァージニアの背中のチャックを下ろす。

「…あっ……ちよっと…」

チャックを下ろしてやっと脱げるようになったドレスに手をかけ、恭介に振り返る。

「着替えるから、部屋の外にでてて」

少し恥ずかしそうに言うヴァージニア。

「わ、わかった」

その言葉を聞いて恭介も急に恥ずかしくなり、急いで部屋を出た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3441e/>

ぷりんせすデイズ

2010年10月9日23時04分発行